

17
2014

特集
都市創造の新潮流
未来に向けたまちづくりキーワード

■小学生が文化財をガイドする
子どもが地域の文化財について学び、地域に愛着を持つための機会として「文化財子どもガイド」を半田・犬山・新城の3箇所の建物で実施した。2012年度より始まり3度目となる今回も愛知登文会の事業として行ったが、今後の継続性のためには、所有者・地域・小学校などとの連携が必要となるだろう。(2014年)

子どもを対象とする取り組みは愛知登文会独自のものともいえ、体験事業とあわせ、その取り組みを紹介する実践事例集を平成27年11月に発行。平成26年からは特別公開事業を実施。所有者、専門家、市民など文化財に関わる多くの方の協力で実施することができ、ネットワークの広がりをみせている。

特集
ひと・まちを動かすマネジメント

■歴史文化を活かした新たな文化を紡ぎだす
～四間道・那古野界隈の地域まちづくり～

2012年10月、地域の方で地域を育てるべく、地元組織など13団体協会員となり、まちづくり協議会が発足した。地域の認知度を把握するための住民向けアンケートの実施や、2017年3月廃校予定の小学校施設の跡地活用に向けて名古屋市中区と共同で要望書を提出するなど、実践的な活動の経験を活かし、地域まちづくり構想の確定を目指している。(2015年、特集)

まちづくり協議会の活動は続き、2016年1月に地域まちづくり構想を作成。なお、四間道・那古野界隈は、様々な団体により、商店街、町並み保存地区、堀川を舞台としたイベント、町家等のリノベーション、町並み保存に向けた取り組みなどが行われ、都心界隈の注目スポットの一つとなっている。

19
2016

特集
Road of SPACIA
～25年とこれから～



11
2008



特集
新しい都市のデザイン 対談 山村真一さん

■名駅ちよい乗りバス運行実験
～名古屋駅前エリアのさらなる魅力向上への試走～
名古屋駅前では超高層ビル開発が続き、駅に集まる人々の増加に対して、近距離目的地への移動手段がなく不便である。2007年11月、「名駅ちよい乗りバス」の運行実験の結果、手軽に利用できる移動手段は有効であり、本格導入できれば名古屋駅前は一層にぎわいのあるエリアになることが期待できる。(2008年、特集)

名駅での実験後、2011年には栄・大須でも同様のちよい乗りバスの社会実験を行い、都心を制覇。地域を巻き込んだ車内企画で乗る楽しみも提供し、利便性と併せて利用者には好評。ちよい乗りバスをはじめ、LRT、BRT、コミュニティサイクルなど多様な移動手段の導入で都心の魅力がアップすることを期待したい。

ネットワークを広げるきっかけづくりというラバダブの役割は変わっていないものの、この20年でSNS等情報発信手段の多様化により、紙媒体のあり方は大きく変化している。ラバダブ創刊時は、まだネット上の情報は限定的で、機関紙や雑誌などの記事が重要な情報源だった。現在ではネット上の様々な情報を簡単に検索できるが、一方で情報が多すぎるがゆえに読むのに時間がかかる。また、ネットワークづくりに関してもSNSでの頻繁な交流と比較し、年1回発行のラバダブでは太刀打ちできない。

しかし、ネットがあれば紙媒体は不要ということはなく、ネットをより活用するための紙媒体のあり方もあると考える。それは読者が求める情報へ誘導するきっかけを提供することではないかと。ラバダブではスペースシアという目を通して選んだ情報を伝えていきたい。

Twitterの140字という文字数制限は伝えたいことを伝えられる最適な文字数であるといわれている。簡潔にしっかりと伝えていくことを意識しながら、スペースシアとしてのまちづくりへの思いを発信していきたい。

★ ラバダブの全号は、弊社ホームページに掲載中 ★

20
2017

16
2013

特集
「歴史文化」を
みつめ・そだて・つなぐ

■古民家空き家を活かす
～美浜町での取り組み～

美浜らしさを感じる黒い木造の「鏝間の家」の町並みが減ってきている。行政と大学が連携し、高齢者向けサロンと子育て中の親子向けサロンを古民家空き家で実験的に開催し、古民家の魅力を多くの人に感じてもらう。古民家の保存・活用のため、今後もこうした取り組みを継続していくことが望ましい。(2013年、特集)

「空き家問題」に多く関わる端緒となった業務。残念ながらこの空き家に関しては、地域からの保存活用の声を生み出せずに終わってしまったが、大学と連携した活用実験はまちづくりにおける空き家活用の有効性を示したと思う。多様な主体をいかに巻き込み、地域の共感を生み出していくかが重要だろう。

12
2009



特集
名古屋圏における
エリアマネジメント
の展開
対談 稲本健一さん

13
2010



特集
過去・現在・未来
10YEARS
対談 石原武政さん

スペースシア創設20周年&代表取締役交代の節目として、お世話になった15名の方から、「これからのまちづくり」や「コンサルタントに期待すること」についてメッセージを寄せていただいた。

14
2011

特集
まちの「宝」
対談 藻谷浩介さん



10
2007

15
2012

特集
Take a wander
～街中をぶらぶら歩こう～



■久屋大通が名古屋を変える
～豊かな公共空間を活かした都心の魅力アップ～

栄地区には大須や栄ミナミなど面的に個性あるエリアが広がり、それらを久屋大通が南北軸として結んでいる。衰退の懸念の声も聞かれる中、久屋大通を有効活用した魅力向上を目指し、ワークショップや7つの大学研究室による提案模型の展示など、市民を巻き込んだ取り組みが進められている。(2012年、特集)

久屋大通沿いに住所を有するコンサルとして意欲的にプロポーザル参加。これまでのネットワークを活かし多面的な展開を試み、久屋大通再生に向けた気運醸成を図った。その後、NPO法人化された久屋大通発展会が中心となり、様々なイベントや社会実験を実施。スペースシアも会の一員として参加している。

特集 ラバダブが20年間伝えてきたこと

～ んどん んどん 見た・聞いた・考えた ～



正月にスペースシアの活動報告や東海地域のまちづくりへの提案などを伝えるための社外報として発行してきた「RUB-A-DUB(ラバダブ)」が、本号で第20号を迎えた。毎回、特集テーマを議論し、各自が1年を振り返りながらまちづくりへの思いや将来展望も含めて記事を作成してきた。そうして書きためた記事には、その時々まちづくりの手法やキーワード、その変化が反映されている。本号では、創刊号から第19号までのいくつかの記事を振り返り(記事要約)、記事掲載後の展開などを紹介(コメント)するとともに、これからのラバダブについて改めて考えてみたい。

vol.1
1998

スペースシア設立5周年企画として発行をめざしたが、生みの苦しみを味わい2年後の1998年に創刊。年賀状がわりに、日頃の業務を離れた正月のゆったりとした気分読んでいただき、各所員の紹介記事をきっかけにネットワークが広がることを期待し、話題の人物と代表との対談、寄稿文なども組み込み、A3というサイズにもこだわった。「rub-a-dub(ラバダブ)」とは太鼓の音を表す擬音語で、見たこと・聞いたこと・考えたことを「どんどん♪」発信していきたいという思いを込めて名づけた。

特集
地場産業と地域連携
対談
ジョン・ギヤスライトさん

記事要約 →

■「東海道」ならぬ「陶街道」によるやきもの産地ネットワークの形成
～瀬戸焼・常滑焼・美濃焼・萬古焼～

東海地域は全国有数のやきもの産地の集積地にもかかわらず、その魅力を活かしていない。広域的に連携し産業振興やまちづくりのあり方を自由に討論する「やきもの産地ネットワーク研究会」の組織化を試みた。机上の議論に留まらず、やきものまつりを共同事業として開催し、やきもの産地振興の新たな展開につながる大きな一歩になった。(1998年、特集)

コメント →

1995年の若手研究員3名の自主研究から始まった「やきもの産地ネットワーク研究会」は、その後「やきもの産地交流・連携推進協議会」や「陶磁器産地活性化推進連絡会議」などの活動につながった。産地を越えた商品開発や販売体制構築、2005年愛知万博会場内での「陶の国まつり」開催など、やきもの4産地の連携はさらに継続・深化していった。

■ワークショップ方式を活用した住民主体のまちづくり・公園づくり
～大曾根北地区「六郷北がったい公園」での試み～

創造的なワークショップは、住民が主体的にまちづくりに取り組んでいく上の第一歩として重要な意味を持つ。大曾根北地区の公園づくりでは、1年目はリーダーに馴染みのないワークショップを理解してもらい、2年目はより多くの地域住民の参加を促すため、演劇やゲームなど様々な仕掛けを用意したワークショップを試みた。(1998年)

この業務を端緒に、数々の住民参加型の公園づくりワークショップを積み重ねてきた。約10年で約10箇所の公園づくりに関与。どのワークショップでも模型づくりや旗揚げアンケートなど様々な試行錯誤を重ねながら、意見集約のノウハウを蓄積してきた。この経験が、公園づくり以外の分野の住民参加型まちづくりを展開する基礎になっている。



2
1999

特集
動き出した市民活動
対談 菊地敬一さん

特集
過去・未来まちづくり
10YEARS
対談 アルニ・バクシーさん

■「愛知住まい・まちづくりコンサルタント協議会」発足
1999年11月、愛知県に事務所をおくコンサルタント19社などが集まり、良好なまちと地域社会づくりに貢献することを目的に発足した。この協議会の活動が行政、住民、専門家のパートナーシップによる新たな住まい・まちづくりの展開の第一歩となるよう、第1期の代表・事務局として働きかけていくつもりである。(2000年)

会員のコンサルタントが毎年持ち回りで代表・事務局を担っており、当社は1期目に続いて16期目(2014年度)にも担当した。近年は、防災(減災)・歴史・観光・多文化共生など多様化する課題に着目しながら、自主企画のほか他組織との合同講演会なども展開してきている。



9
2006

特集
東海地方の都市再生
対談 橋爪伸也さん

7
2004

特集
ナゴヤ
都心に負けない地域の力
対談 原田さとみさん

■大須301ビル誕生!!
2003年12月、大須30番第1地区第一種市街地再開発事業によって「大須301ビル」が竣工した。組合施行と隣接地での個人施行との一体的な推進が特徴である。構想段階から13年、経済情勢等の変化により計画内容は大きく変わったが、「権利者の手づくりによる再開発」という当初の精神は今も受け継がれている。(2004年)

この事業はスペースシア設立当初から地権者、行政、関係者等の調整役として取り組み、名古屋中初の組合施行となった。旧ききごった煮の街と新しい大須との融合等を目標に多くの事業関係者の協力を得た。この事業の完成は、スペースシアの再開発事業部門確立の礎となるとともに人的ネットワークの拡大につながった。

8
2005

特集
まちのリニューアル
対談 石原司郎さん

4
2001

特集
産地とネットコミュニティ
座談 早川嘉英さん、村瀬裕さん、金津洋一さん、杉江恵子さん、小林丈太郎さん、千葉晋也さん

5
2002

特集
名古屋の都心考
対談 岡田邦彦さん

■名古屋 オープンカフェの試み第二弾
名古屋都心部の豊かな公共空間を有効活用するため、歩道上でのオープンカフェの社会実験を2000年に初めて実施し、2001年には期間や場所を拡充した。現行法令では欧米にあるような店舗が個別に設置する歩道上のオープンカフェは困難であるため、地域管理体制を整えた上で、新しいルールのもとで常設化をめざしていくべきであろう。(2002年、特集)

前代表井澤の関心からボランティアベースで関わったもの。創刊号で海外事例の紹介を行い、第9・10号でもその後の経過報告をしている。名古屋の豊かな道路空間を活用しようというこの試みは、名古屋市の交通まちづくりの「みちまちづくり」にも反映されており、賑わいづくりの方策として注目されている。



6
2003

特集
まちを使いこなす
対談 相羽寿郎さん

